調査報告

トロス司教座聖堂発掘報告（二〇一三）—出土貨幣及び封緘について[1]

村田光司

キーワード
ビザンツ期　トロス　リキア　貨幣　封緘

二〇一三年夏期に実施された、トロス司教座聖堂発掘調査において、二点のビザンツ期貨幣（金貨、青銅貨）及び一点の封緘が出土した。本稿ではこれらについて紹介し、若干の考察を付す。

（一）貨幣

①ノミスマ・ヒスタメノン金貨（バシレイオス二世及びコンスタンティノス八世治世、九八九～一〇〇一年）（写真1a・b）

○寸法　直径約二五㎜
○出土場所　第七室（Room 7）の東壁際、ほぼ床面レベル（海抜四七二・七七二m）
○状態　両面に若干の掠れが認められるも良好
○型打ち軸　一八〇度

表面に、十字架付きの光背を伴い福音書を抱えるキリストの胸像が見え（いわゆるパントクラトール型）、十字架の腕は、それぞれ一つの鋲で留められた二枚の板で表装されている。キリストを取り囲む形で次の銘文が刻まれている。

写真 1a　金貨（表面）

写真 1b　金貨（裏面）

+IhSXPSRЄXRЄGNANṬ…
+ Ἰη(σοῦ)ς Χϱ(ιστό)ς, Rex regnant[ium]
「イエス・キリスト、諸王の王」

裏面には、中心に総主教の小十字架 Patriarchal cross crosslet が配され、その両側に二人の皇帝像が描かれている。左側の像は右側に比べやや高い位置に置かれ、水平／垂直に並ぶ胸部の装飾に象徴されるビザンツ中期以降のローロス λῶρος をまとい[2]、左手で、右側の皇帝の手の位置より高い位置で小十字架を掴んでいる。右側の人物は、クラミュス χλαμύς と呼ばれる衣装をまとった共同皇帝である[3]。両者の周縁に次の銘が並んでいる。

+bASILÇÇQNṢTAṆṬ…
+Βασιλ(ειος) (καὶ) Κωνσταντ[ίνος) β(ασιλ(εῖς)]
「皇帝バシレイオスとコンスタンティノス」

銘文と衣装などの特徴から、バシレイオス二世帝（左側）とコンスタンティノス八世帝（右側）の共同統治期（九七六～一〇二五年）に製造された高純度のノミスマ金貨、すなわちヒスタメノン貨である。フィリップ・グリアースンの

研究に従えば、両皇帝の発給したヒスタメノン貨は大まかに六つのクラスに分類されるが、われわれの金貨はそのうちのクラス三（正確にはClass III [b]）に該当する。このクラスは例えば、バシレイオス二世がまとう衣装の変化（modified loros）によってそれ以前のクラス（クラス一と二）と区別され、一方でまた彼の冠が神の御手によって吊り下げられている（suspended crown）か否かによって、それ以降のクラス（クラス四から六）とも区別される（クラス三は冠のみである）。この金貨は両皇帝の治世中期、すなわち九八九年のアビュドスでの勝利から一〇〇一年までのものと推測される。[4]

②青銅貨（?）（四世紀末～七世紀）（写真2）

○寸法　直径最大約一二㎜　○重量　○・七g
○出土場所　四号墓（T4）人骨四（B4）の下
○状態　両面とも判読不能

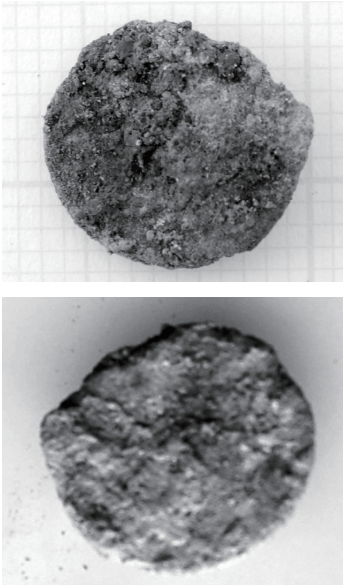

写真２　青銅貨

腐食が甚だしく、銘を読み取ることはできない。残された指標であるその大きさのみから判断するならば、四世紀末から五世紀にかけて用いられた青銅貨（AE 4）か、[5]あるいは五一二年に導入され七世紀中葉まで製造されたペンタヌミウム pentanummium / πεντανούμμιον である可能性が高い。[6]

（二）封緘

①皇帝のプロトスパタリオスおよびテマ・キビュライオタイのプロトノタリオスであるコンスタンティノスの鉛封緘（一一世紀）（写真3ａ・ｂ）

○寸法　直径約二二㎜　　○重量　五・○g
○出土場所　第六室(Room 6)の西壁付近、深度約六〇cm(海抜四七三・六五〇m)、おそらく崩壊した建物の瓦礫層と、後の堆積層の間
○状態　表面底部に部分的な欠損及び掠れ、裏面底部に若干の掠れが見られるも、良好
○型打ち軸　○度

表面には、比較的明瞭な外縁の中に、光背を伴ったマリアの胸像があり、その胸部にはキリストを象ったメダリオンと思しきものが見える。[7] マリアは右手でこれを掴んでいる(左手部分は欠落しているが、おそらく右手と同様)。像の両脇にはマリアの名が見える。

M̄P ⁝ ⁝ Θ̄V
Μή(τη)ρ Θ(εο)ῦ

また周縁部に次の銘文が記されている。

.ЄROḤΘЄIΤWCWΛ
[Θ(εοτόκ)]ε βοή̄θει τῷ σῷ δ(ούλῳ).

裏面には、表面周縁部の銘に続く五行からなる銘文が記され、底部に装飾が施されている。

+KѠN ⁝ CTANṚA ⁝ CΠAΘ·SA· ⁝ NOTAP. ⁝ ḲVRḤP ⁝ ·:·
+Κωνσταν(τίνῳ) β(ασιλικῷ) (πρωτο)σπαθ(αρίῳ)
(καὶ) (πρωτο)νοταρ(ίῳ) [τ(ῶν)] Κυβηρ(ναιωτῶν)
「マリアよ、汝が奴隷たるコンスタンティノス、皇帝のプロトスパタリオスにしてテマ・キビュライオタイのプロトノタリオスを救い給え」[8]

現在刊行されているカタログ類には、同一の印章から製造された封緘を見出すことができない。[9] 銘に用いられる文字や省略記号は一〇世紀から一一世紀ごろのものとみられる。[10]

さらに詳細に年代決定を試みれば、表面のマリア像がまず注目される。[11] ここに描かれているマリアはニコポイオス型に分類され、キリストの描かれたメダリオンを両手で掴むことを特徴とする。この型は、封緘においては一一世紀の三〇年代以降に普及したとするヴェルナー・ザイプトの見解が通説であるが、例外もある。またマリアが掴んでいる対象物がメダリオンではない可能性も排除できないため、この像のみを年代決定の指標とすることには危険が伴う。[12]

次いで注目されるのは爵位と官職である。ここに記されるコンスタンティノスについて、文献や他の封緘史料中に同一人物を見出すことはできない。彼が帯びる爵位（皇帝のプロトスパタリオス）[13]および官職（テマ・キビュライオタイのプロトノタリオス）[14]の組み合わせは、この封緘が、帝国においてとりわけ爵位価値の低下が進んだ一一世紀以降のものであることを窺わせる。[15]全体的な傾向として、一〇世紀以前には、プロトスパタリオス保持者はほぼテマ長官職級に限られていたものが、一一世紀のとりわけ中葉以降にはテマの裁判官（κριταί）をはじめとする下級の役人の間にも拡がっていくことが指摘されている。[16]現在、テマ・キビュライオタイのプロトノタリオイは、われわれのコンスタンティノスの他に、すべて封緘史料から次の八名が知られる。[17]

―ヨハネス、皇帝のマンダトル（八世紀末ないし九世紀第一四半期）[18]
―コンスタンティノス、爵位不明（八世紀末ないし九世紀第一三半期）[19]
―ニケフォロス、爵位不明（九世紀前半）[20]
―テオクレトス、爵位不明（九世紀前半）[21]
―名前不明、ベスティトル（九世紀後半）[22]
―ニケフォロス、ヒュパトス（九世紀第三四半期）[23]
―ステファノス、皇帝のスパタロカンディダトス（一〇世紀第二四半期）[24]
―ヨハネス、スパタロカンディダトス（一一世紀前半）[25]

封緘という史料の性格上、各々の推定年代には幅を持たざるをえないとはいえ、このリストからも、時代が下るに連れた官位の（見かけ上の）上昇、あるいはむしろ爵位価値の低下を見て取ることができる。[26]われわれのコンスタンティノスが帯びる「（皇帝の）プロトスパタリオス」という爵位は、一〇世紀以前に編まれた官職表においては常に、上に現れたいずれの爵位（マンダトル、ベスティトル、ヒュパトス、スパタロカンディダトス）よりも上位にあり、[27]従ってわれわれの封緘は、これら八点に比べ、より時代が下るものと見てよかろう。

一方で下限年代であるが、こちらも決定的な指標はない。現在までの史料状況に照らせば、プロトスパタリオスの爵位は一二世紀初頭を最後に確認されなくなり、[28]またテマ・キビュライオタイの役人自体、存在が確実なのは一一世紀中葉までである。[29]マンヅィケルトの戦い以降のセルジューク朝の進出にともない、リキアにおけるビザンツ行政は衰退したと想定されるが、テマ・キビュライオタイの廃止時

写真 3b　封緘（裏面）

写真 3a　封緘（表面）

期についてはなお結論が定まっておらず、われわれの封緘が、現在知られるこれら爵位や役人の更なる存続を示すものである可能性は否定出来ない[30]。

以上から考えるに、性急な結論は慎むべきであろう。われわれの封緘の年代は、一一世紀の前半まで確認される既存のプロトノタリオスよりは後代に置かれる可能性が高いが、一方で下限に関して言えば、これが一一世紀末、場合によってはさらに後代のものである可能性も退けるべきではない。

註

（1）貴重なコメントを下さった調査隊の先生方、および封緘史料に関する助言をくださったVivien Prigent博士（CNRS）に感謝申し上げる。なお、本報告において取り上げた貨幣・封緘について、出土場所を含めた綜合的な議論として、浦野聡「トロス司教座聖堂発掘報告（二〇一三）―考古学・建築上の知見から」（本誌所収）も参照せよ。

（2）いわゆる「modified loros」。Ph. Grierson, *Catalogue of the Byzantine coins in the Dumbarton Oaks Collection and Whittemore Collection*, vol. III, Washington D. C., 1973, pp. 116-126, とりわけ pp. 120-125.

（3）ビザンツ宮廷における衣装については前註のほか、E. Piltz, Middle Byzantine Court Costume, in H. Maguire (ed.), *Byzantine Court Culture from 829-1204*, Washington D. C., 1997, pp. 39-51を参照。

（4）Grierson 1973（註2）, pp. 599-633.

（5）M. Mays / Ph. Grierson, *Catalogue of Late Roman Coins in the Dumbarton Oaks Collection and in the Whittemore Collection*, Washington D. C., 1992, pp. 39-47.

（6）M. Hendy, *Studies in Byzantine monetary economy, c. 300-1450*, Cambridge, 1985, pp. 475-500. Cf. A. R. Bellinger / Ph. Grierson, *Catalogue of the Byzantine coins in the Dumbarton Oaks Collection and in the Whittemore Collection*, vols. I-II, Washington D. C., 1966-1968.

（7）封緘表面下部の部分的欠落から、これが確実にメダリオンであるとは言えない。これがニンブスを伴ったキリストである可能性も、低いとはいえ排除しきれない。

（8）裏面に見える銘文の一行目、右端の「N」は、文章全体を囲んで描かれるはずの円と重なっている。この事実は、裏面に印章が二度押しされたことを示している。

（9）現在までに発見された封緘は約八万点と言われるが、その探索にあたってまず参照すべきは、V. Laurent による包括的なコーパス作成の試みである。V. Laurent, *Le Corpus des sceaux de l'empire byzantin*, vol. V. 1. *L'église*, 3 parties, Paris, 1963-1972; id., *Le Corpus des sceaux de l'empire byzantin*, vol. II. *L'administration centrale*, Paris, 1981. 彼の集成から漏れたもの、及び新たに公になった封緘については、個別のカタログに当たらねばならない。代表的なものとして、米国のダンバートン・オークス研究所所蔵品（E. McGeer / J. Nesbitt / N. Oikonomides, *Catalogue of Byzantine seals at Dumbarton Oaks and in the Fogg Museum of Art*, 6 vols., Washington D. C., 1991-2009）、ロシアのエルミタージュ美術館所蔵品（一部の刊行に留まる。例えばН. П. Лихачев, *Молибдовулы греческого Востока*, Сост. и автор коммент. В. С. Шандровская, Москва, 1991）、フランスの国立図書館所蔵品（例えばJ.-Cl. Cheynet et al., *Sceaux byzantins de la collection Henri Seyrig*, Paris, 1991）、トルコのイスタンブール考古学博物館所蔵品（J.-Cl. Cheynet et al., *Les sceaux byzantins du Musée archéologique d'Istanbul*, Istanbul, 2012）など。この他にも重要なコレクションが数多く存在し、また現在に至るまで新たな封緘の発見が続いている。より詳細な文献一覧をここに紹介する余裕はないが、ダンバートン・

オークスのHP（http://www.doaks.org/resources/seals/seals-bibliography）や、インターネット上で公開されているM. Jeffreys et al., *Prosopography of the Byzantine World* (2011 edition: http://pbw.kcl.ac.uk) が大いに参考となる。一方で、ほぼ隔年ごとに刊行されている *Studies in Byzantine Sigillography* 誌において、約五年ごとに、新たに発見ないし刊行された封緘史料の一覧が掲載される。この一覧には、民間のオークション等で出品されたものも収録されている。最後に、最新の動向については、現在でもやはり *Byzantinische Zeitschrift* 誌の熟読が必須となろう。

（10）Cf. N. Oikonomides, *A Collection of Dated Byzantine Lead Seals,* Washington D. C., 1986; C. Morrison, L'épigraphie des monnaies et des sceaux à l'époque byzantine, in D. Harlfinger / G. Prato (a cura di), *Paleografia e codicologia greca. Atti del II Colloguio internazionale (Berlino-Wolfenbüttel, 17-21 ottobre 1983),* Alessandria, 1992, p. 251-274 (répr. dans C. Morrison, *Monnaie et finances à Byzance : analyses, techniques,* Aldershot, 1994, art. II).

（11）封緘におけるマリア像について、概略的には次を参照。W. Seibt, Die Darstellung der Theotokos auf byzantinischen Bleisiegeln, besonders im 11. Jahrhundert, in N. Oikonomides (ed.), *Studies in Byzantine Sigillography,* vol. I, Washington D. C., 1987, S. 35-56; V. Penna, The Mother of God on Coins and Lead Seals, in M. Vassilaki (ed.), *Representations of the Virgin in Byzantine Art,* Milan, 2000, pp. 209-217, 365-369; J.-Cl. Cheynet, Introduction à la sigillographie byzantine, dans id., *La société byzantine. L'apport des sceaux,* vol. I, Paris, 2008, p. 1-82 : p. 52-58.

（12）W. Seibt, Der Bildtypus der Theotokos Nikopoios. Zur Ikonographie der Gottesmutter-Ikone, die 1030/1031 in der Blachernenkirche wiederaufgefunden wurde, *Byzantina* 13/1 (1985), S. 549-564: S. 556-558. もしマリアが抱んでいるものがメダリオンではなく、キリストのニンブスであった場合、上限年代はさらに遡ることになる。ザイプトは後者をニコポイオス型の「原型Vorform」と呼び、九世紀の事例まで紹介している。とはいえわれわれの封緘の表面にみえるΜΡ ΘΥの銘は、一〇世紀以降にしか確認されないものであることも付記しておこう（ibid., S. 558）。

（13）皇帝のプロトスパタリオスを含む、プロトスパタリオスの種類と役割については、R. Guilland, *Recherches sur les institutions byzantines,* vol. II, Paris, 1967, p. 111-119.

（14）プロトノタリオスの職務については、J. B. Bury, *The Imperial Administrative System in the Ninth Century,* London, 1911, p. 94; N. Oikonomidès, *Les listes de préséance byzantines des IXe et Xe siècles,* Paris, 1972, p. 315など。

（15）近い例として、E. McGeer / J. Nesbitt / N. Oikonomides, *Catalogue of Byzantine seals at Dumbarton Oaks and in the Fogg Museum of Art 4: The East,* Washington D.C., 2001, no. 22.36 (Paschalios, imperial protospatharios and protonotarios of Armeniakon: 10-11th c.). 爵位の品位低下については、J.-Cl. Cheynet, Dévaluation des dignités

et dévaluation monétaire dans la seconde moitié du XIe siècle, *Byzantion* 53 (1983), p. 453-477 (répr. dans id., *The Byzantine Aristocracy and its Military Function*, Aldershot, 2006, art. VI); N. Oikonomides, Title and Income at the Byzantine Court, in Maguire (ed.) 1997（註3），pp. 199-215 (repr. in N. Oikonomides, *Social and Economic Life in Byzantium*, ed. E. Zachariadou, Aldershot, 2004, art. XVII).

(16) V. Laurent, Mélanges d'épigraphie grecque et de sigillographie byzantine, *Échos d'Orient* 31 (1932), p. 419-445: p. 439-440; Guilland 1967（註13），p. 110.

(17) A.-K. Wassiliou, Beamte des Themas der Kibyrraioten, in H. Hellenkemper / F. Hild (hrsg.), *Lykien und Pamphylien* (Tabula Imperii Byzantini 8), Wien, 2004, S. 407-413: S. 413 のリストに依った。

(18) J. Nesbitt / N. Oikonomides, *Catalogue of Byzantine seals at Dumbarton Oaks and in the Fogg Museum of Art 2: South of the Balkans, the Islands, South of Asia Minor*, Washington D.C., 1994, no. 59. 18.

(19) G. Zacos / A. Veglery, *Byzantine Lead Seals*, vol. I, Basel, 1972, no. 1801.

(20) 個人蔵の封緘。Wassiliou 2004（註17），S. 413, Anm. 157.

(21) Münz Zentrum (Köln) 84, 29. 11. 1995, Nr. 877.

(22) Zacos / Veglery 1972（註19），no. 2670.

(23) Nesbitt / Oikonomides 1994（註18），no. 59. 20.

(24) Zacos / Veglery 1972（註19），no. 296.

(25) Nesbitt / Oikonomides 1994（註18），no. 59. 19. 同定年代はWassiliou に従う。

(26) 同様の傾向は、テマ・キビュライオタイの長官職および裁判官職にも見ることができる。Wassiliou 2004（註17），S. 407-412 を見よ。なお上記リストの他に、近年新たなテマ長官の封緘が刊行された。I. Jordanov (ed.), *Corpus of Byzantine seals from Bulgaria*, vol. I: *Byzantine Seals with Geographical Names*, Sofia, 2003, no. 41. 1; Cheynet et al. 2012（註9），no. 3. 51.

(27) Oikonomidès 1972（註14），p. 292 など。

(28) Oikonomidès 1972（註14），p. 297.

(29) ミカエル・プセロスの書簡（一〇四八年以降）の宛先に、同テマの裁判官（名前不詳）が見える。K. N. Σάθας, *Μεσαιωνικη Βιβλιοθηκη*, τ. 5, Paris, 1876, σ. 297, 351. その他に、最末期の実務官僚のものと目される封緘史料として例えばNesbitt / Oikonomides 1994（註18）. nos. 59. 7, 59. 8.

(30) テマ・キビュライオタイに関わる包括的な史料証言についてはHellenkemper / Hild 2004（註17），S. 116-125. 同テマの長官（Doux）は一一四七年にも確認されるが、職務を伴うものであったかは大いに疑問である。Cf. Wassiliou 2004（註17），S. 410.

（名古屋大学大学院、日本学術振興会特別研究員DC）

Basilica Excavation Report, Tlos, 2013: Coin and Seal

MURATA, Koji

During the excavation of the basilica at Tlos (in Lycia, Turkey) in 2013, we found two coins and a lead seal, as shown below.

1. Nomisma-Histamenon of Basil II and Constantine VIII (r. 978-1025)

Dia. : 25mm. On the obverse, a facing bust of the Christ Pantokrator with the legend on the circumference:

+IhSXPSRЄXRЄGNANṬ… : + Ἰη(σοὺ)ς Χρ(ιστό)ς, Rex regnant[ium].

On the reverse, which is engraved at 180 degrees in relation to the obverse, two facing busts of Basil and Constantine with a patriarchal cross crosslet between them, held in the former's left hand. On the circumference, the legend is visible:

+ЬASILÇÇQṆṢṬAṆṬ… : +Βασίλ(ειος) (καὶ) Κωνσταντ[ίν(νος) β(ασι)λ(εῖς)].

It could potentially be identified with the Class III-b (dated 989-1001), according to the classification by Ph. Grierson, *Catalogue of the Byzantine Coins*, vol. III-2.

2. Bronze coin

Dia. : 12mm. The poor condition of this piece does not allow us to distinguish letters. If we rely simply on its size, the piece seems to be of the type "AE 4" (IVth-Vth century) or Pentanummium (early VIth century - middle of VIIth century).

3. Lead Seal of Constantine, imperial protospatharios and protonotary of the thema of the Cibyrrhaeots

Dia. : 22mm. On the obverse, a bust of the Virgin Mary holding the medallion of the Child on her breast (the type of Nikopoios). On both side of the effigy, the initials are engraved:

M̄ΗΡ | Θ̄V̄ :Μή(τη)ρ Θ(εο)ῦ. On the circumference, the legend is visible:

.ЄROḤΘЄITWCWΔ : [Θ(εοτόκ)]ε βοήθει τῷ σῷ δ(ούλῳ).

On the reverse, a continuation of the legend on five lines, based on the dots, can be seen:

+KWN | CTANR'A | CΠAΘ'SA' | NOTAP. | ЌVRHṖ | ··:··

+Κωνσταν(τίνῳ) β(ασιλικῷ) (πρωτο)σπαθ(αρίῳ) (καὶ) (πρωτο)νοταρ(ίῳ) [τ(ῶν)] Κυβηρ(ραιωτῶν).

XIth century. No parallel is known.